



超兵器 R56 号を撃て

上原 勇希

油彩、キャンバス

本作は、内灘闘争、沖縄基地問題、新型コロナウイルスなどの社会問題をテーマにした。日本の絵画史では 1950 年代にルポルタージュ絵画を描く記録性を重視した社会派作家が登場した。

その題材に北陸の歴史的事件である内灘闘争があった。内灘町に米軍の大砲の試射場が建設され、地元住人の頑強な抵抗運動があったのだ。

時は経ち現代の日本は様々な分断に見舞われ、長い経済不況を経験し、近年では新型コロナの問題に直面した。メディアはその危機を繰り返し報道し、マスク警察と呼ばれる群衆や、行政のワクチンのキャンペーンが盛んに行われた。

他面、初等教育でパソコンを使用することを義務化され児童は常にネットにアクセスする時代になった。

人々は真実とは、正しく生きるとは何かを思考する機会を持たず、混沌とした現代はフランシス・ベーコンの「ノヴム・オルガヌム」にある人はさまざまなイドラによって誤りを犯すという比喩を想起させられる。この現状に対して沖縄にルーツを持つ作者は日々空手をして健康維持に努めることにした。

沖縄問題と内灘闘争、そしてコロナの問題は相似をなしそれらは鉄板道路で繋がっていることを現代のルポルタージュ絵画として本作に描いた。